

希望を耕す

利用の構想力

東京大学教授・建築学
松村秀一
Shuichi Matsumura

10年ぶりの上海

過去三〇年ほどの間、私の研究室には中国から一〇名ほどの留学生がやってきた。日本で起業する人、中国で大学や研究所に勤める人、日本の企業で両国をまたにかけて働く人等々、それぞれに活躍していて頼もしい限りである。この春、そのなかの、無錫で住宅地開発に精を出すOGと、上海で建築設計に従事するOBとを訪ねた。

在学中に大した世話もしていなかった私のようなものですら、留学生は何年経っても驚くほど丁寧に接してくれる。有り難いことだ。お陰で、無錫でも今の中国の住宅地開発の様子を詳細に知ることができたが、今回触れておきたいのは、一〇年ぶりに訪れた上海の変わりようである。

最近の日本では景気減速関係の報道ばかりを目にする中国だが、上海のまちを歩く限りそうは見えなかった。実際、現地のOBの話によれば、上海や蘇州の不動産価格は今年に入ってからの上昇ペースにあるという。

浦東地区は、一〇年前ですら想像できなかった

た数の高層ビルが埋め尽くし、さらに高さ中国一の超高層ビルが建設されていた。上海中心ビルである。オープン直前のその上海中心ビルの一八階に上らせてもらったが、一〇年前に話題になっていた森ビルの上海環境中心を見下ろす大パノラマを堪能できた。「発展」という動態をヴィジュアルライズした、いかにも現代中国らしい風景だ。

ところが、このビルを降りて旧市街を歩くと、上海の生活空間のあり様が、この種の「発展」とは異なる方向にも転じつつあると感じさせる場があちこちに現れ始めていた。今や観光ガイドにも載るほど有名な事例だが、1933老場坊と田子坊、この二つの新しい場を今回初めて体験した。

前者は、一九三三年にイギリス人建築家の設計によって建てられた鉄筋コンクリートの元食肉処理場。初期鉄筋コンクリートの堅固さを剥き出しにしたデザインと、食肉処理場独特の空間構成が、得体のしれない雰囲気醸し出すのだが、今はここに若者向けのショップやカフェ、レストラン、そしてイベントスペースが埋め込まれ、新しいタイプの活気に満ちていた。

後者は、十数年前、近代上海の都市住宅の典型である煉瓦造の里弄建築（「里弄」・北京の「胡同」と同様、路地、横町の意）に、アーティストがアトリエやギャラリーをかまえ始め、今や結構広い街区一帯に、アトリエ、ギャラリー、そして洒落たショップ、レストランといった新たな活動の場が埋め込まれ、スリが問題になるほどの賑わいを見せていた。

ストックへの投資を生む「利用の構想力」

一〇年前の上海で観光スポットになっていたのは新天地。それは、ある里弄一帯を再開発し、以前の里弄建築風の新築建物を配置した商業地だったが、今回訪れた二つの場合は明らかにそれとは違う。本物のストックをそのまま使っているのだ。上海にも新しいストック活用時代が到来し始めているのだと実感した。

既存ストックが十分にあるまち・時代において、人々の生活環境を豊かで楽しいものにするための投資は、「そこで何をやってやろうか」という空間利用者側の構想力、すなわち「利用の構想力」によって促進される。そこが、新築のまち・時代とは違うところだ。

例えば、田子坊の里弄建築を自分のアトリエとギャラリーにしてやろうと考えたアーティストの構想力。それは、今やニューヨークの定番スポットになっているかつての軽工業エリアSOHO (South of Houston Street) で、一九六〇年代にコンバージョン投資を促進したアーティストたちの利用の構想力と同じ類のものである。

そして、ニューヨークSOHOの場合、ジョージ・マチューナスを中心とする芸術運動のグループ「フルクサス」が、SOHOの空きビルにアトリエを持ちたいというアーティストたちの利用の構想力を、協同組合という形で組織化したことが、ストックへの投資を促進したように、面的な拡がりを持たせるためには、個々の利用の構想力を顕在化させ、組織化することが欠かせない。上海の二つの事例の場合、どのような主体がどういう方法で利用の構想力の組織化を進めたかは確認できていないが、世界中で起こっている利用の構想力の組織化には、様々な方法があるに違いない。それを学ぶことは、「希望を耕す」ことに繋がるだろうと私は確信している。



1933老場坊